



## 馬耳東風

コロナで明けコロナで暮れた一年だった。当初、社会にこれ程大きな影響を与える感染症とは想像していなかった。世界的に利己主義が横行しつつある中、コロナが侵襲し多くの先進国で未曾有の打撃を被っている。先行きが見通せない今、経済界では今後の事業展開の方向を模索しているようだが、事業縮小、人員整理以外に妙案は中々出てこないような印象を受ける。

最近、政界・経済界を筆頭に、組織の中樞をYes man で固め、異論者を排除する空気が年毎に強くなってきたと感じる。側近から邪魔者を排除する人事は時代、洋の東西、国家、会社を問わず、権力者が常套手段としてよく使う。これは近視眼的には組織的合理性に基づいた措置であろうが、これが繰り返されるとその組織は、均質化し、正に視野狭窄症に陥る。権力者・経営者等は緊張感を失い、批判を許さない独善的な解釈、施策を繰り返す事で、世間の常識とかけ離れた考え方が常識化し、組織は自壊に進むことになる。COVID-19を巡る対応、企業の倒産事例から見えてくるのは、まさに異論者を排除し均質化、監視役不在状態となり、自浄能力を失った組織の姿であろう。

教育界に対して、激しく変わる社会に対応するため、柔軟で独創的な発想が出来るような人材を育てるために個性を伸ばす教育を推進すべきという提言が出されて幾年経つだろうか。文部科学省は、大学は知識偏重の画一

的な指標で入試の合否を判定するのではなく、もつと理解力・判断力を指標として合否を判定すべきと言い出した。何を今更という感を抱くが、それは横に置くとして、問題の本質は入学者の選抜試験法にあるのではなく、一旦入学すれば、それ程勉強しなくても大部分の学生が卒業できる今の大学教育の質の問題ではなからうか。教育は、学生に対して社会で起こる様々な問題に直面した時、自分で考え、判断して、行動できるための英知を修得させる事が目的と理解している。しかし、世間から聞こえてくる事は小学校でも中学校でも個性的な生徒ははじめの対象になったり仲間はずれにされる事が多いという情報である。没個性化する事が安心して楽しい学校生活を送るための条件とすれば、社会が期待する教育の理念とは逆方向に進んでいると言えそうだ。今の大学生も少数派に身を置き緊張するより、多数派に寄り添い安心したいという安定指向が強いと言われる。これは失われた時代とも言われる過去20年余の間に教育を受け、社会で起こる様々な暗い出来事を観て育った20代、30代の若い世代の現状を映しているのであろうか。以前、この欄で高度に専門化が進む社会では組織が細分化し、その中に身を置くと全体状況が理解できない人間になるサイロエフェクトについて記した。こんなサイロに落ちないよう、来る年がCOVID-19から解放され、将来を背負う若者達が広い視野で社会を、そして将来の夢について語れる年になってほしいものである。

(青)